



森乱丸異聞
～本能寺



あの夜、彼らはい
かに戦ったか

作：泊瀬光延

彼は外から聞こえる馬のいななきと車の軋む音に目が覚めた。一頭や二頭の馬のいななきではない。しかも聞き覚えのある陣中のざわめきと響き。

軍勢だ！

乱丸は隣に寝ている主（あるじ）からそっと身を離すと、障子の前に走り半ばに開け濡れ縁に出た。まだ外は暗い。

広大な本能寺の堀はここからは遠く見える。しかし堀の外から、松明の明かりに照らされる幾条もの煙の筋が見えた。

宿直（とのい）の小姓が槍を小脇に挟んで走ってきた。乱丸は小さいが鋭い声で問うた。

「何事ぞ！」

「軍勢に囲まれております。山門を守っている者の申すには水色桔梗の旗！日向守（光秀）様にございます！・・・た、ただの出陣前のご挨拶ではないかと門兵が申しておりますが・・・」

乱丸が叱咤した。主に聞かれたら、この者はすぐさま用無しとして処罰されるであろう。

「軍兵を動かすには理由がある！今の日向守に三草越え（中国方面に向かう時の中継地点）をせずに兵を連れてここに挨拶に来る理由ぞあるか！」

後ろから低い声が聞こえた。

「・・・光秀か・・・やはり」

「御屋形様！」

ゆっくり床から身を起こした主は、懐に右手を入れて脇を搔きながら人事（ひとごと）のように言った。

「お乱。ここをどう切り抜ける」

「・・・お姿を僧形にお変えください。光秀は女子と僧を殺すようなことはしません」

「儂がしたことは光秀はせぬと言うか！」

乱丸と小姓は一瞬身を震わせ、信長の前に畏まった。内務の家臣の大部分はここで信長の逆鱗に触れまいとする。だが、乱丸は自分の考えを常に言い放ってきた。

十三歳の時からそうやって仕えてきたのだ。命を賭けて信長と向き合ってきた。それが忠義と信じていた。

乱丸の生まれたときの記録に『玉のやうな男子（をのこ）』であったとある。乱法師と呼ばれた。

長じて文武の才に長け、森家の誉れと囂された。信長に目見えしたとき、理知的な応対と端座する秀麗な姿に信長は惚れ込んだ。

主君の命でお側に上がり、伽を命じられたとき必死に抵抗した。他の小姓等が、手討ちになるのではないかと嫉妬混じりに噂した。森家の家督を継いでいた兄の長可（ながよし）は、何も言わず家宝の脇差しを乱丸に授けた。

武士の脇差しは、敵の首級を挙げる時と主君を守るとき、そして恥を残さぬよう自害するときのためにある。

「私はそのような御奉公は致しませぬ！」

あるとき再三の主の命に抗い、背を伸ばして座り睨むその目は、興福寺の阿修羅像の如き凄烈さであった。十三の小童ながら、意に染まぬ恥をかくのなら、その場で喉を突くつもりであった。

信長は怒りに身を震わせ、何も言わずその場を立った。

隣の座敷にいた前田利家が信長の行く手に胡座を移し、じっと主を睨んだ。信長は甲高い声で叫んだ。

「犬（利家の幼名、犬千代から）！何も言うな！」

乱丸は家で沙汰を待っていた。

主君をああまで怒らせれば切腹あるいは追放であろう。家の面目を守るために死ぬ覚悟をした。まだ戦（いくさ）働きもしていないというのに。

軍配を取れば正に鬼神の信長の側で働きたかった！

森家の邸に使者が来た。

意外にも使者は信長の折文を乱丸に手渡した。

上意の沙汰状と思っていたが。

乱法師殿江（へ）奉る。

至らぬ主（あるじ）と思し召し候えば見放し給うな。

死ぬ事なかれ。

帰蝶（濃姫）に勝るとも劣らぬ宝なりける。

朝（あした）に顔を見せ給え。それだけが望みにて候。

信長 花押

信長が家臣に敬語を使った！恋文に近いものだった。元服もしていない家臣の子に敬意を払う文に感じいった乱丸は、もう信長を拒まなかった。

この時代、主と従者が衆道の関係を結ぶというのはよくあったと言われる。だが、信長と乱丸の物語は好事家の興味を引くに十分である。この後の歴史書に、愛の対象になった少年達に『美童』、『艶なる者』（常山紀談）などの描写を見かける。それを民衆の好みに集大成したのはやはり井原西鶴の『武道伝来記』であろうか。

話を本能寺に戻そう。

乱丸は必死に信長を見上げて言った。

「人の気質を見極め、裏をかくは戦（いくさ）の一手！御屋形様、ここは私が残り守ります。どうか御準備を！」

乱丸と宿直の者の後ろに、次々と寝間着姿の小姓達が参じてきた。

正室、濃姫が白絹の帷子（かたびら）の上に萌葱（もえぎ）の打掛（うちかけ）を羽織り、二人の女中を従えて信長の前に正座をした。

濃、この時、四十八歳。名は帰蝶。何と鳥肌が立つほど美しい名ではないか。

濃姫とは美濃から嫁いだのでそう呼ばれたという。信長との間に子は恵まれず、既に女盛りを超えていたが、その気品はどの妾も敵うことではなかった。乱丸と信長の関係を許していたのは子供が出来ぬことの負い目であったか、せめてもの謝罪であったのか。

本心は語らねど、乱丸の滅私奉公の心をを見て、この主従の縁（えにし）を認め、信長の世話を乱丸に任せていた。

乱丸は信長と関係を持った後、自ら濃姫に会いに行った。濃姫が死ねと言えば死ぬつもりであった。

濃は平伏して言を待つ乱丸に聞いた。

「・・・そちは御殿とどのやうな契りを結ばれました？」

乱丸は恥ずかしさに顔を真っ赤にしたが、哀しげな目で言った。

「御屋形様はお濃様に申し訳がないと仰せでした。子を授けられなかったのは御自分のせいだと。吉乃様やお鍋様と御子をおなしになった後、恥ずかしくお濃様をお抱きになれなくなったと。お濃様は宝なり。なれど抱けぬと。乱よ、お前も宝なりければどうか濃の代わりに抱かれてくれよと」

信長は濃を慰めるために乱丸を使ったのかもしれない。濃はにこりとしたようだった。

戦の前兆の軍馬の甲高いななきが聞こえた。

信長は皆を見回して言った。

「いかに厚情の光秀と雖も、ここは誰も逃さぬ。囲むまで戦笛（いくさぶえ）の聞こえぬは儂が比叡を討ったときと同じじゃ。この寺ともども滅ぼすつもりであろう。汝等、幼き者が多く不憫なれど、男の子なれば覚悟せよ。女どもは苦しゅうない。男どもがなだれ込まぬ内に去るがよい」

女がすすり泣く声が聞こえた。濃姫だけはにこりと笑って首を横に振った。

過去、常に信長の決断が正しかったことは皆良く承知していた。だがこれが最期と判断せしは・・・。

乱丸が悲痛な声で言った。

「御屋形様！ならば天下布武のお志（こころざし）は！」

信長は乱丸の瓜実顔を愛おしむ目で見た。その横には濃姫も信長を見上げている。

「又左（前田利家）がおる！猿め（羽柴秀吉）がおる！じゃが光秀には天下は取れぬ・・・朝廷の威光にすぎりこの様な大義のないことをするようでは・・・」

以前、光秀は祖先である名族、土岐氏の自慢を信長の前でしたことがあった。信長にそのようなことは一文にもならぬと一笑に伏された。

この場で信長を討ったところで、一家臣の反逆と見なされ大義があるとは誰も言わぬ。信長を怖れる朝廷から詔勅を得た訳ではなかろう。虎の威を借りるつもりであろうか？

明らかに短慮である。日向守らしくなく何かを見過ごしている。いや、光秀は智の人である。それ以上の理由があるのか？

既に戦いの氣勢に入っている軍兵数千（本能寺を囲んだ兵は三千五百と言われる）に対し、幼き小姓達と数十の馬廻り衆と警護兵だけでは、戦いの結果は火を見るより明らかである。

だが、戦いの決意をした乱丸には、死すべき運命の悲痛さなど頭から消えていた。如何に少数を以って多数の敵を翻弄するかの楽しみが湧いてきた。

これぞ戦国に武士として生まれた人間の特徴である。

陣中評議で、若年ながら信長に促され、意見を言わされることがあった。信長は試しているつもりだろうが、当人に取っては試練である。

居並ぶ諸将に面目を失わせぬ為に、笑みを浮かべた信長から一番に仰せつかるのであったが、乱丸のその的確な意見は常に皆を唸らせた。

自分の情報不足で判断できぬ所は軍議に残したが、乱丸の出した方向性に間違いは少なかった。名将、父森可成（よしなり）と兄長可（ながよし）から受け継いだ血は隠しようがなかった。

北と南の門に足輕を二十づつ配置し守らせた。

残りの三十は主従の寢所となっている宿所と本坊の周りに配した。敢えて分散したのは信長の居場所を探し当てられることを出来るだけ遅らせる為である。

信長旗下の主立った武将は他国へ出征しているか、自国にて兵を準備をしており、このたびの朝廷訪問のための上洛には、小姓二十と馬廻衆、足輕の七十しか連れて来ていない。

長子の信忠は、やはり少数の部下を連れ北の妙覚寺に泊まっている。連絡をしたいが、外に出れば槍襖（やりぶすま）と鉄砲になにびとも通れないだろう。事実、このとき光秀の四千の兵が二条御所と妙覚寺に向かっていた。

乱丸は寝間着の白帷子（しろかたびら）の上に鶴の丸紋の入った緋（くろ）梅色の小袖を纏い、堂を出でて北門に走り扉の後から叫んだ。

若干、十七歳であり、信長の寵愛によって男（をのこ）の無骨な体への変化が遅れている喉の声は高く響いた。

「門外にお集まりの方々にももの申す。我は森乱丸長定である！ここは御屋形様の御座あらせる所なれば、斯かる狼藉は何事ぞ！」

門外では一瞬騒々しさが消えた。だが次に、

「我が名は惟任（これとう）日向守（ひゅうがのかみ）（明智光秀）の先鋒、三宅孫十郎、見参仕る！」

「我ら（我と同じ）は四天王又兵衛！」

「藁地甚九郎の兵ならむ！」

と口々に叫ぶのが聞こえ、直後に山門の扉に大木槌が打ち突けられた。

信長は濃姫とともに、宿坊の最も奥にある戸板で仕切られたる大部屋に入った。

住持が籠もり断食修行をする場である。信長の指示により厨房から油の樽が運び込まれた。戸板は厚い板に黒い金具で補強され、中から鍵が掛かるようになっている。

住持以下の僧達はすべて本坊戒壇の前に集まり、法華の読経をはじめていた。逃げようとすれば明智側に殺される。何故なら、十数名の寺警護の僧兵が自分達は関わりがないと裏手から逃れようとした。しばらく経つと扉の外から彼らの首が投げ込まれたのだ。

読経をすることがそれを逃れる可能性のある唯一の方法であろう。しかし寺の堂塔がすべて焼き討ちされればすべて死ぬ。比叡の御山の様に。このたびはその時信長に反対した光秀によって

。

南無妙法蓮華経。

一心の読経の声が地から湧く唸りのように聞こえる。

その声の中、信長と濃姫は板戸の間で現世での別れを惜しんだ。

「濃・・・いや帰蝶。儂を恨んでおるか？」

信長の問いに帰蝶は首を振る。

「父、道三が真顔をして尾張のうつけの嫁になれと言った時のことを思い出します・・・それからというもの、恐ろしい鬼と優しい童が一緒になった方と分かりました。おもしろう御座いました」

信長は久々に濃姫を懐きその髪の匂いを吸った。帰蝶は揶揄するように囁いた。

「今でも乱殿に嫉妬をいたしておりますよ」

乱丸以下二十名の小姓はその部屋の前で身支度をしていた。袴の腿立（ももだ）ちを取り纏（たすき）鉢巻きを結ぶ。

濃姫が出てきた。

「わらわも戦うことにしました。御屋形様の代わりです。御屋形様はそうしたくとも首をむぎむぎやりたくないの出来ぬと」

蘭丸は聞いた。

「では、御屋形様は今・・・？」

「神仏と話されております。はじめて神仏の小言を聞くことになった、と笑っておられました。・・・お乱様とお小姓の方々に武勲の誉れをと・・・」

濃は乱丸の額に手を触れた。二人はしばらく見つめ合ったが、そのお互いの恐れのない目の中で、帰蝶は赦し、乱丸は許され。

信長は、どうすれば逃げおおせ得るかをもう一度考えていた。

しかし、どう考えてもこの状況では逃げることは出来ない。生きたまま捕まるなど選択にはなかった。決断の人である信長には、起きる現実が手に取るように見えていた。光秀の目的と自分の運命が一致していた。当初の判断から何も違いはない。嗤うと、
「是非もなし」

信長はつぶやき、燭台の光の中すくと立ち、一人ゆるやかに舞い始めた。

突然、軍太鼓が打ち鳴らされ、それに続いて各方面からも呼応の太鼓が鳴りだした。そして幾万とも思える『うを一』というときの声があがる。

鉄砲が両山門の扉に打ち込まれた。同時に無数の矢が、塀の外から降って来て境内にいた者どもに突き刺さる。

真っ暗な中から襲いかかる矢羽。

どおんという雷鳴とひゅんひゅんという風切り音が坊のなかの者を恐怖させた。

堂の中で鎧を持たぬ小姓たちは、太刀を抜き放ち鞘を放（ほう）った。腰に下げる拵えになっている鞘は寝間着の帯に差せば邪魔になるだけだ。自害するに遅れをとらぬよう脇差を差し入れる。

北と南の山門でわあという男達の声がした。

槍と刀の噛み合う音。

明智の兵が堀に梯子を渡し、塀を越えて入ってきた。飛び降りたところを長槍の守兵が突き通す。槍を抜こうとするが握られて抜けない。次に飛び降りた甲冑武士に向き直って刀を抜こうとしたが遅かった。すでに抜き身を持った敵は、彼の喉を喉当ての隙間から貫いていた。

なんのなにがし一番に敵を討ち取ったり、という名乗りが各所からあがった。

後から降り立った軍奉行の配下の足軽がそれらの者に駆けより、御身の主と御姓名は、と巻き紙に書き付ける。名前を言っている間に、後から入ってきた武士たちがその横を疾駆し各堂塔に信長を求め斬りこんで行く。

名前を聞かれた武士はたまらず、筆を走らせている足軽を突き飛ばし、低い唸り声をあげて本坊に向かった。

小姓頭の乱丸の他、十二から一五、六歳の少年武士たちが集まっている板張りの間に、雨戸を打ち破り、遂に数人の武士がなだれこんで来た。

信長のいる奥の部屋を彼らは認めた。乱丸たちの警護がかえって信長の居場所を知らせてしまった。

しかし功名にはやる彼らは、それを他の兵に報じない。

板張りの上で寝間着に袴、着流しの小姓たちと数名の襷鉢巻き姿の長刀（なぎなた）の女威丈夫が敵に立ち向かう。

命を捨てて振り回される長刀ほど恐ろしいものはない。刃渡り二尺の大反りの大刀が長柄によって一間（1.8メートル）の弧を以って振りおろされる。しかも女性の首を取っても軍功とはならぬ。

槍と太刀を持つ小姓にまず彼らは向かった。女性としての素直な恐怖心からか、女中らは戸板に退き、長刀を青眼に構え、幼きをのこ等に先陣を譲った。

十字槍を小脇に構え、板戸の前を守っていた乱丸に槍を持った武士が二人近づいた。

「やあやあ、これは乱法師殿」

「俺を知っているのか。名を名乗れ」

彼らは目をあわせにやりとして言った。

「先鋒、升屋小十郎重時じゃ！今回二つのことに特別の褒章が出る。信長の首とお前だ」

「官名なきは小禄の者か！ならばこの首とて手柄にせよ！だが、御屋形様には一槍とて付けさせぬ！」

この状況で不敵な乱丸の言葉に、甲冑に身を包んでいる彼らさえたじろいだ。

後ろから弓手が数名踏み込んできた。それを見て二人の武士のうちの一人が、叫んだ。

「長刀をまず討て！」

対峙しているのは森乱丸であるということを皆に知られたくない。手柄を確保するために皆の気を逸らそうと、この武士は考えた。

そのとき、大音声が。

「待て！」

赤拵えの見事な甲冑を着た武者が言った。

「そこにおわすは、右府殿の御正室、帰蝶様とお見受けする。帰蝶様の御母堂は明智光継様の御息女！光継様と主君光秀とは御親戚で御座る。御命をゆめゆめ軽（かる）んじるなかれ。いざ御

退出を！」

濃姫は一步出（いで）て若いをんなの様な声で返答した。

「これは面妖な！仇（かたき）を縁者と申してどこに我が夫を捨てて逃げる妻やある！ここに居るは天下に号令すべき男（をとこ）の女（をんな）なるや！」

だが刀を抜かず両拳を握り、悲しげに立ちすくむ赤の武者に一礼し、

「どなたか存ぜぬが、この様な時に斯かる心遣い頼もしきもののふぞ。あの世に行きても忘るることはない！いざ！」

その武士は身を震わせると弓手を招いた。

さっと敵が堂の壁に引くと、弓を引き一斉に女中達に矢を浴びせた。少年達は散開していて却って女を狙いやすくなっていた。一人が倒れると次の一人へ。戸板に逃れた矢が突き刺さる。

最後に倒れた帰蝶が板戸に向かって叫んだ。

「ご主人様！今生のお別れです！父、道三とともにあの世でお待ちしております・・・」

戸板の奥からは誰かがうなずくような気配がした。

信長の正室、濃（帰蝶）の消息は史書に出てこない。

生き残った信長の次男、織田信雄（のぶかつ）の後年の分限票に「安土殿」として六百貫を貰っていた女性が記録にあるが、信長の正妻の待遇としてはどうであろうか。しかも濃は家中では「鷲山殿」と呼ばれていたはずだ。愛妾のお鍋殿か他の名前不詳の妾であろう。

敵はぞくぞくと侵入してくる。

誰かが叫んだ。

「皆の者！ここからは名だたる信長のお小姓衆の首取り合戦じゃ！」

今度は槍と刀で敵は繰り出した。弓手に手柄を渡すわけには行かぬ。槍が少年に突き刺さり横の者が首を切り落とす。

年端もいかぬ彼らと、甲冑に槍太刀を携え、数々のいくさに生きてきた男達との実力の差は天と地ほどもあった。

若い者達への虐殺の地獄であった。

「小河愛平（おごう・あいへい）、お相手いたす。いざいざ！」

甲高い声に相手の武士は哀れを催した。先の赤拵えの武士（もののふ）だった。

「金津正直（まさなお）と申す。いざお覚悟を！」

若干、十二歳の愛平は教わった通りの名乗りと、古武道の組太刀の形を取った。幼い腕で右上方に二尺の刀を振り上げ、さらに後右下にまで切っ先を落とす。力を貯めて刀を前に返し右足を踏み込む。えいやという幼い叫声。だが、正直は刀も抜かず動こうとしない。

「旦那様！」

横に控えていた従者がたまらず槍を出した。

素槍は飛び込んできた愛平の胸を貫いた。短い断末魔の声。父母のここにおらぬのがせめての幸せか。

愛平は刀を落としその場にぺたんと膝を突いた。息が出来ず血で咽せていた。

「旦那様！早く止（とど）めを！それが慈悲じゃ！」

茫然としていた鎧武者ははっと目覚めた様に体を震わせ、その腰の太刀を抜いて愛への横に歩んだ。

「おお！金津殿！お手柄じゃな！」

後から堂に入ってきた武者がなじるように言って、信長を求めて通り過ぎた。

「愛平殿！お覚悟！」

虐められて泣き出した様な愛平の横顔が、苦しみのためか俯いた。その頬に涙の筋が。正直の太刀は首の皮を残し、愛平の首を斬った。

正直は崩れた愛平の体を仰向きに寝かせ、首をもとの位置に戻した。

正直は愛平の死に顔を見ながら泣いた。

「我が先主の朝倉義景公と愛王丸様の仇と討ち入れば、斯様な子供の首を取らねばならぬとは！
南無阿弥陀仏」

朝倉義景は元龜四年（1573）に信長に愛児、愛王丸とともに一族を皆殺しにされた。

正直とその従者は骸を拝むとそのまま宿坊を離脱した。正直は後に細川家に伺候し、光秀の娘ガラシャと関ヶ原の合戦の前夜に運命を伴にする。何という悲しき武士よ。

この時代にはこのような真の武者（むさ）がうようよといたのだ。

小姓衆の中でも乱丸と二、三の者のみは実戦の経験があった。

天真正香取神道流の槍さばきで甲冑の隙間を狙う。入り乱れて堂の外に出て戦う者もいる。

乱丸は槍侍と太刀侍に向かい合った。槍持ちは先ほどの乱丸を見知っている武士だ。太刀侍は彼の配下のような。乱丸の必死の立ち回りに、鎧武者と言えどもなかなか傷を負わせられない。乱丸は突きだされた鍵槍を寸前にかわすと柄を掴み脇に抱え込んだ。

他の小姓たちは既に討たれたものが多く、敵の配下が髻（もとどり）を掴み、首に刀をあてているのが見えた。板間は血の海。弟の坊丸、力丸たちはどうしただろうか！

手が空いた者どもが板戸に駆け寄り、木槌でついに厚い板を破って、人一人入れる穴を開けた。我先に中に入ろうとして争ったが、一人入ると叫びとともに押し戻されて来た。中から槍で突き通され、鎧の背中から穂槍が突き出て血飛沫が飛んだ。それとともに油の燃える臭いが中からした。

突き刺された武士の体で中がよく見えぬが、肩の隙間より炎（ほむら）が見える。

一人の甲冑武士が気合を出して、穴の横に二間の素槍（鈎、鎌などが付いていない槍）を突きとおした。槍はずぶと戸板のうちにいった。

手応えあり！

武士が槍を引くと穂先が血にまみれている。武士は狂喜して槍を両手で掲げ、大音声にわめいた。

「安田作兵衛国継、右府殿に一番槍を仕った！」

他の侍どもが口々にまたわめいた！

「まだまだ一番槍とは申さず！」

「右府殿とは限らぬ！」

と次々に戸板に槍を突き刺し引き出す。しかし引き出した穂先に血は付いていない。ますます猛り狂って突き出し始める。血糊で滑って手を怪我する者も出た。

数々の槍の穴から煙が噴出てきた。既にこときれた武士の体が板戸の穴から転げ落ちた。

中に入ろうとした武士が、穴から射す火炎の熱に手を掲げて目を細めた。見ると床の板の隙間からも黒い煙が立ち始めていた。

乱丸はそれを見て、

「御屋形様！乱もすぐ参ります！」

相手の槍を抱え込んだまま武士の首に十文字槍を突き通し、鍵槍を奪って、太刀を八艘に担いで襲いかかってくる足軽の目を突いた。血飛沫がかかる。とどめを刺すと自分の槍を引き抜き、

戸板の前に駆け寄った。

「おのれ作兵衛とやら、百姓侍め！お前の槍など御屋形様への汚れじゃ！」
と槍を繰り出した。

他の者は信長の首を狙いなんとか戸板の向こうに入ろうとして、彼らの戦いには加わって来ない。

作兵衛は乱丸の槍の鍵にとっさに槍の柄を合わせ勢いを削いだが、鎧の胴に切っ先を当てられ押されて行った。怒り狂った乱丸は力任せに突き進み、遂に板間の外の濡れ縁まで作兵衛を追い出した。

「うわあ！」

作兵衛は縁の段差に足を取られ、宿坊の外の溝の中にどうと倒れてしまった。乱丸は縁から飛び作兵衛を串刺しにしようとした。

作兵衛が必死に乱丸の槍の矛先を自分の槍の柄で下に逸らした。乱丸の槍はそれでも作兵衛の下腹をずぶりと刺した。

「ぐわっ！」

槍は作兵衛の片方の睾丸を刺していた。乱丸が体を預けてさらに突き刺す。作兵衛は槍の刃に陰囊の半分が切り取られたことを感じた。

「下郎！思い知ったか！」

隣の本坊の炎に乱丸の怒りに充ちた顔が見える。

前髪が汗と返り血で頬に張り付き、半開きにした口からきりと結んだ白い歯が見える。

興福寺の阿修羅が正に降臨したか！

なんという神とも見紛う者との邂逅！

屈強な作兵衛の鎧に包まれた胸の中から、熱い震えが湧いてきた。作兵衛の髭面が笑った。

そして呟いた。

「・・・美しい」

作兵衛の思わぬ反応に乱丸がはっと手を緩めた。そのとき作兵衛の両手に持っていた槍が右に回転し、乱丸の頭を打った。

「信長殿一番槍と森乱殿討ち取った！安田作兵衛国継也！」

既に宿坊及び他の堂塔に火の手が上がり、早暁の空に幾条もの黒煙を上げていた。

乱丸異聞 第一話完

森乱丸異聞 ～本能寺

<http://p.booklog.jp/book/23318>

著者：泊瀬光延

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hatsuse/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/23318>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/23318>